

ハヤ語, アンコーレ語およびトーロ語の声調の比較

—特にトーロ語の声調消失に関連して—

梶 茂 樹

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

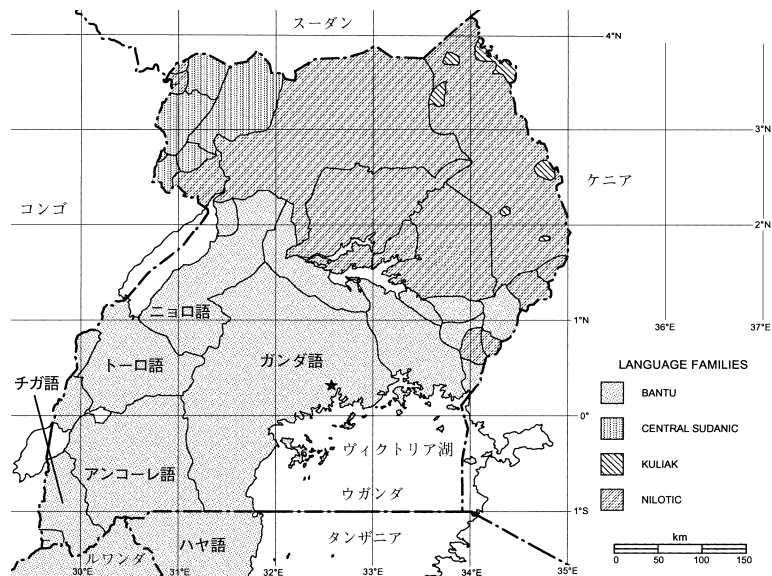
キーワード: バンツール, ハヤ語, アンコーレ語, トーロ語, 声調比較

1. はじめに

アフリカのほぼ赤道以南に話されているバンツール系諸語の特徴として, しばしば挙げられるものに, その複雑な名詞のクラスと, 込み入った声調とがある. しかしながら, これらの特徴は, 多くのバンツール諸語に見られるものであることは事実であっても, すべての言語が複雑な名詞のクラスと, 込み入った声調とを有しているわけではない.

例えば, コンゴの口語スワヒリ (Swahili) 語やリンガラ (Lingala) 語は, クラスとしては通常, 人間と非人間しか区別せず, それに単数と複数を組み合わせても, 4つの区分があるにすぎない. またコンゴのビラ (Bira) 語では, 名詞のクラスそのものが消滅している. 声調に関しても, たしかに多くの言語が複雑な体系を有する一方で, スワヒリ語などでは完全に失われており, 通常, 単語の終わりから2音節目を高く, そして幾分強くかつ長く発音するのみである.

本稿は, 筆者の現地調査の資料に基づき, タンザニア北西部からウガンダ西部にかけて話されている言語の声調の比較を行う. タンザニア北西部からウガンダ西部にかけては, 南からハヤ (Haya) 語, チガ (Kiga) 語, アンコーレ (Ankole) 語, トーロ (Tooro) 語およびニョロ (Nyoro) 語という非常に系統的に近い言語が連綿と話されている (地図参照). 筆者は, これらのうちハヤ語とアンコーレ語はすでに調査を終えている. そして現在トーロ語の調査を継続中である. チガ語とニョロ語については, 現在, 予備的調査を行っているのみであり, その



地図：ウガンダとそれに隣接するタンザニア北西部の言語。ハヤ語はタンザニア領，そしてチガ語，アンコーレ語，トーロ語，ニョロ語はウガンダ領で話されている。Grimes(ed.) (2000) のウガンダの地図に基づいて作成。

データは本稿では原則として用いない。未だ体系としての把握に至っておらず，記述が間違っている可能性があるからである。

さて，これらのタンザニア北西部からウガンダ西部にかけての言語を見ていて気づくことは，一番南のハヤ語が，比較的古い声調体系を有しているのに対して，北部のトーロ語ではほぼ声調の対立が失われてしまっていることである。

(1) ハヤ語	アンコーレ語	トーロ語	
a. oku-gulu 15,6	oku-guru 15,6	oku-gúru 15,6	「脚」
b. olu-lími 11,10	oru-rími 11,10	oru-lími 11,10	「舌」
c. ebi-tfwánta 8	ebi-tfwánta 8	ebi-tfwánta 8	「唾」
d. omu-zi 3,4	omu-zi 3,4	omú-zi 3,4	「根」
e. omú-ti 3,4	omu-ti 3,4	omú-ti 3,4	「木」

f. e-ságama 9,10	e-fágama 9,10	e-sagáma 9,10	「血」
g. eki-fú:ndikizo 7,8	eki-fú:ndikizo 7,8	omu-fundikízo 3,4	「栓」

(1) の例について述べる前に、以下の議論にも関係するので、ここで名詞の形態論的構造についてふれておく。ハヤ語、アンコーレ語、トーロ語のいずれにおいても、名詞は「初頭母音-接頭辞-語幹」という構造をしている。初頭母音 (augment) というのは、母音1個 (e-, o-, a-) からなる一種の冠詞で、接頭辞の前の位置に来るが、統語的環境によっては現れないこともある (その統語的環境は言語によって異なる)。接頭辞の形を示すと、-CV-, -N-, -V-, -∅-(ゼロ)のものがあり、名詞のクラスによって、1. -mu-, 2. -ba-, 3. -mu-, 4. -mi-, 5. -i- ~ -li- (言語によっては -ri-), 6. -ma-, 7. -ki- (言語によっては -ci-), 8. -bi-, 9. -N- ~ ∅ (ゼロ), 10. -N- ~ ∅ (ゼロ), 11. -lu- (言語によっては -ru-), 12. -ka-, 13. -tu-, 14. -bu-, 15. -ku- となる (あと、いわゆる場所クラスがあるがここでの議論に無関係なので省略する)。そして名詞は一般に、クラス1とクラス2、そしてクラス3とクラス4というふうに2つのクラスのものペアになり、単数と複数とを示す (以下の例では単複のペアのクラス番号は示すが、例は単数形のみを掲げる)。名詞語幹は、2音節、3音節のものが最も多く、4音節、5音節となると複合語や接尾辞のついた動詞からの派生名詞以外にはほとんどない。なお、表記であるが、-は名詞の接頭辞と語幹との境界を示している。また、´は高声調 (H: high tone) を、^は下降調 (F: falling tone) を、そしてマークなしは低声調 (L: low tone) を示す。

さて、(1) からわかるように、ハヤ語、アンコーレ語、トーロ語は、子音、母音などの分節素に関してはお互いよく似ており、一見したところ、声調に関しても大きな違いはないように見える。しかし、よく見ると、ハヤ語、アンコーレ語では様々な位置に高声調が来るのに対して (ハヤ語では下降調もあり)、トーロ語では一貫して単語の終わりから2音節目が高くなっている。またハヤ語とアンコーレ語はお互い非常によく似ていながら、例えば「木」がハヤ語では omú-ti 3,4 となるのに対してアンコーレ語では omu-ti 3,4 となるなど、細かいところの違いがある。

東アフリカ一帯で共通語として話されているスワヒリ語が声調を無くしているこ

とは周知のことであるが、スワヒリ語発祥の地である東アフリカの海岸地帯から1000キロも内陸に行った所で、声調の消失が生じていることは、ほとんど知られていない。現在、筆者の行っている研究は、なぜ、そしてどのようにトーロ語で声調が失われたかを解明することであるが、まだこの地域の言語をすべて調査し終えたわけではないので、ここでその答えを提示するわけにはいかない。特に、トーロ語の北に話されているニョロ語が重要かもしれないと考えるが、これのデータが現在欠けている。しかしながら、すでに調査を終えたハヤ語とアンコーレ語を比較するだけでも、どのようにハヤ語的体系から声調の弱화가起こり、アンコーレ語的体系へと至ったかを示すことができる。そして、トーロ語の体系はその延長線上に位置づけることができるのではないかと考える。従って、本稿では、トーロ語の例を示すと同時に、ハヤ語とアンコーレ語の体系を提示することによってその異同を示し、その変化の跡づけを行うことを主眼とする。なお、声調データは、動詞よりも区別の多い名詞類(名詞と形容詞)を主として用いる。

2. ハヤ語

ハヤ語は、タンザニア北西部に話される。本節ではハヤ語の名詞の声調のパターンを、梶(2001b)に従って、語幹の音節毎に掲げておく(データは梶(2000)参照)。

(2) ハヤ語の名詞の声調のパターン (単独形)

1 音節語幹語

a. omu-zi 3,4 「根」

b. omú-ti 3,4 「木」

2 音節語幹語

a. omu-nofu 3,4 「肉, 身」

b. eki-zíla 7,8 「禁止事項」

c. omu-kâma 1,2 「王」

d. ekí-laba 7,8 「木の実 (の一種)」

3 音節語幹語

a. omu-guruka 3,4 「跳毘」

- b. aka-ningli 12, 14 「リュート」
 c. omu-gurúsi 1,2 「老人」
 d. eki-kójozi 7,8 「プランテン・バナナ」

4 音節語幹語

- a. eki-gendelelo 7,8 「意図」
 b. eki-kankabána 7,8 「バナナのほう」
 c. eki-ɲuma:ɲúmi 7,8 「影」
 d. olu-julúluzi 11,10 「木の一種」
 e. eki-káalakamba 7,8 「鱗」

5 音節語幹語

- a. em-puru:tulilo 9,10 「女結び」
 b. aka-ifeikogóto 12,14 「亀」
 c. VCV-CVCVCVCV̂CV (例なし)
 d. VCV-CVCVCV̂CVCV (例なし)
 e. VCV-CVCV̂CVCVCV (例なし)
 f. oku-búndamiliza 15 「体を屈めてお茶を注ぐ」

(2) の表で示してある声調は、単語を単独で発音した場合のものである。それは基底形とは異なるが、対応はしており（以下 (3) 参照）、それぞれのパターンの区別に曖昧さは生じていない。この言語では高声調 H の現われに極めて制限があり、この H に注目すると、(2) の構成は、基底的には次のようになる。すなわち、語幹の音節数に関係なく a のパターンは H がないもの、b のパターンは最後の音節が H のもの、c のパターンは終わりから 2 音節目が H のもの、d のパターンは終わりから 3 音節目が H のもの、e のパターンは終わりから 4 音節目が H のもの、f のパターンは終わりから 5 音節目が H のものである。5 音節語幹名詞ともなると例は少なくなり、複合語を除けば、いくつかの接尾辞を含む動詞の不定形 (= 動名詞) ぐらいしかない。動詞語幹は長いのも短いものもあるが、H が現れるとしたら、接頭辞の -ku- のあとのみである (f. oku-búndamiliza 15 「体を屈めてお茶を注ぐ」の例参照)。

いま、基底形という表現を用いたが、この言語では、声調が変化するのは一般

に終わりの2音節のみであり、その2音節に注目すると基底形と単独形には次のような対応があることがわかる。

(3) ハヤ語の最後の2音節における基底形と単独形の対応

基底形	単独形
-LL	-LL
-LH	-HL
-HL	-FL

それでは、どうして(3)の基底形がわかるかと言えば、単独形に、例えば所有形容詞の「私の」(語幹 -ange)をつけてみればいいのである((4)参照)。この場合、語幹が-LLのもの((4a), (4d)の例)を除いて、基底での形式が出てくる。(4a), (4d)において語幹-LLが-LHとなるのは、そのあとに「私の」が続くと所有形容詞の前にHが挿入され、そのHが名詞の最後の音節に取りつくからである((5)参照)。もちろん(4b), (4c)の場合も所有形容詞の前にHが挿入されるが、Hが2つ連続する場合は右のHが消される。なお所有形容詞「私の」(語幹 -ange)の接頭辞は、それが修飾する名詞のクラスに応じて、クラス1ではu-, クラス3ではgu-, クラス7ではki-などとなるが、これらの変化は声調の変化とは無関係である。

(4) 2音節語幹名詞に「私の」をつけた発音

- a. omunofú gwange 「私の肉」
- b. ekizilá kyange 「私の禁止事項」
- c. omukáma wange 「私の王」
- d. ekílabá kyange 「私の木の实」

(5) 所有形容詞によるHの挿入とそれによる変化

- a. omunofu´gu-ange 3 → omunofú gwange 「私の肉」
- b. ekizilá´ki-ange 7 → ekizilá kyange 「私の禁止事項」
- c. omukáma´u-ange 1 → omukámá wange → omukáma wange 「私の王」
- d. ekílabá´ki-ange 7 → ekílabá kyange 「私の木の实」

以上を要するに、ハヤ語の名詞の声調のパターン数は、語幹の音節数を n とすると $f(n)=n+1$ という式で表される（ただし2音節語幹名詞の d のパターンは例外となる）。なお、(2)と同じことであるが、名詞を語幹の音節数ではなく、基底形のどこに H があるかという観点からは、ハヤ語のデータは(6)のように整理できる。

(6) a. H-0 (Hがないもの)

omu-zi 3,4	「根」
omu-nofu 3,4	「肉, 身」
omu-guruka 3,4	「跳畏」
eki-gendelelo 7,8	「意図」
em-puru:tulilo 9,10	「女結び」

b. H-1 (最後の音節に H があるもの, 単独形では ...HL)

omú-ti 3,4	「木」
eki-zíla 7,8	「禁止事項」
aka-ningfli 12,14	「リュート」
eki-kankabána 7,8	「バナナのほう」
aka-ifeikogóto 12,14	「亀」

c. H-2 (終わりから2音節目に H があるもの, 単独形では ...FL)

omu-kâma 1,2	「王」
omu-gurúsi 1,2	「老人」
eki-puma:pûmi 7,8	「影」

d. H-3 (終わりから3音節目に H があるもの)

ekí-laba 7,8	「木の实 (の一種)」
eki-kójozi 7,8	「プランテン・バナナ」
olu-julúluzi 11,10	「木の一種」

e. H-4 (終わりから4音節目に H があるもの)

eki-kálakamba 7,8	「鱗」
-------------------	-----

以上、ハヤ語名詞における声調の基底形と単独形との関係を示してきたが、そ

れではなぜ単独形でそのような発音になるのかという疑問もあるかと思う。それは私見によれば、単独形では一種のイントネーションがかかっているからである。例えば、基底で -LH のものは単独形では -HL となるのであるが ((3) 参照)、これは、単独形、すなわち、そのあとに休止が来るという条件で、語末の H がその位置では実現されずにその 1 つ前の音節に移るからである。これは、多くの言語に見られる語末における実現の制限である。ハヤ語の声調に関しては、その休止の前という条件が、たんに語末音節のみならず、そのもう 1 つ前の音節にも及んでくるのである。基底で -HL のものが単独形で -FL となるのもそうした制限の一例である。基底の -LL は、単独形でも -LL としたが、これも以上のことを踏まえて言えば、正確ではない。基底の -LL だけに他にかかる制限がかからないということはいえないからである。つまり、この -LL も、細かく見れば、単独形では最後の L はその前の L よりもわずかであるが低く実現される。

なお、以上、声調の実現される範囲をモーラではなく音節としてきたが、その根拠は以下のようなものである。それは、この言語には /i, e, a, o, u/ の 5 つの短母音に加えて、/i:, e:, a:, o:, u:/ の 5 つの長母音と /ei, ai, oi/ の 3 つの二重母音とがあるが、そのいずれもが、短母音と同じ振る舞いを示すのである。なお長母音には、音韻論的に長いものに加えて、高母音の半母音化とそれに伴う代償延長によるもの、そして鼻音複合（鼻音と阻害音からなる）の前で長くなるものの 2 種類の音声的長母音とがあるが、声調に関しては、いずれも同じ振る舞いを示す。

- (7) a. ekilá:la 7,8 「ヤム芋 (の一種)」
 ekilá:la kyange 「私のヤム芋 (の一種)」
 b. eitá:gi 5,6 「枝」
 eitá:gi lyange 「私の枝」
 c. ekyá:la 7,8 「指」
 ekyá:la kyange 「私の指」
 d. omutá:mbi 1,2 「治療者」
 omutá:mbi wange 「私の治療者」

(7) に示した語は、いずれも 2 音節語幹で、基底が -HL のパターンを持つも

のである。(7a)は-HLのHの部分が二重母音,(7b)はHが音韻的長母音,(7c)は半母音化と代償延長による音声的長母音,そして(7d)は後続する鼻音複合による音声的長母音の例である。これらはいずれも(2)における2音節語幹名詞 omukâma 1,2「王」のパターンと同じ振る舞いを示す。もし例えば,(7a)における /ai/ という連続が1つの二重母音ではなくて2つの別の母音からなっているならば,例えば「私のヤム芋(の一種)」は, ekiláíla kyangeではなくて ekiláílá kyange となるはずである(ekikójozi kyange「私のブランテン・バナナ」参照)。以上,ハヤ語の長母音と二重母音について述べたことは,原則,アンコーレ語,トーロ語にも当てはまる(詳しくは,梶(2001a)参照)。

3. アンコーレ語

アンコーレ語は,国は異なるが,ハヤ語のすぐ北に話される。そしてその名詞の声調のパターンは基本的にはハヤ語と同じである(データに関しては梶(2001a)参照)。

(8) アンコーレ語の名詞の声調のパターン (単独形)

1 音節語幹語

- | | |
|---------------|----------|
| a. omu-zi 3,4 | 「根」 |
| b. omú-si 3,4 | 「神経, 静脈」 |

2 音節語幹語

- | | |
|-----------------|-----|
| a. omu-hara 1,2 | 「娘」 |
| b. ama-ríra 6 | 「喪」 |
| c. omu-kâma 1,2 | 「王」 |

3 音節語幹語

- | | |
|----------------------|----------|
| a. aka-gobora 12,14 | 「象の鼻」 |
| b. eci-tentére 7,8 | 「若雌鳥」 |
| c. oru-tongána 11,10 | 「人差し指」 |
| d. aka-tádoaba 12,14 | 「伝統的ランプ」 |
| e. ebí-runjire 8 | 「ソース」 |

4 音節語幹語

- a. aka-hungabebe 12,14 「白蟻」
 b. oru-to:neréra 11,10 「霧雨」
 c. aka-samuníga 12,14 「リス」
 d. eci-gungúniro 7,8 「脱穀したトウモロコシの穂」
 e. eci-sígisiro 7,8 「小さい土鍋」

5 音節語幹語

- a. oku-si:tagirira 15 「足で踏み潰す」
 b. VCV-CVCVCVCV́CV (例なし)
 c. VCV-CVCVCVCV́CV (例なし)
 d. VCV-CVCVCV́CVCV (例なし)
 e. VCV-CVCV́CVCVCV (例なし)
 f. en-tá:gurukane 9,10 「十字路」
 oku-jéndekereza 「見送る」

ハヤ語の (6) と同様に、どこに H があるかという観点からは、(8) は (9) のように分類できる。

(9) a. H-0 (H がないもの)

- omu-zi 3,4 「根」
 omu-hara 1,2 「娘」
 aka-gobora 12,14 「象の鼻」
 aka-hungabebe 12,14 「白蟻」
 oku-si:tagirira 15 「足で踏み潰す」

b. H-1 (最後の音節に H があるもの、単独形では ...HL)

- omú-si 3,4 「神経, 静脈」
 ama-ríra 6 「喪」
 eci-tentére 7,8 「若雌鳥」
 oru-to:neréra 「霧雨」

c. H-2 (終わりから 2 音節目に H があるもの, 単独形では ...HL)

- | | |
|--------------------|--------|
| omu-káma 1,2 | 「王」 |
| oru-tongána 11,10 | 「人差し指」 |
| aka-samupíga 12,14 | 「リス」 |

d. H-3 (終わりから 3 音節目に H があるもの)

- | | |
|-------------------|----------------|
| aka-tádoaba 12,14 | 「伝統的ランプ」 |
| eci-gungúniro 7,8 | 「脱穀したトウモロコシの穂」 |

e. H-4 (終わりから 4 音節目に H があるもの)

- | | |
|------------------|---------|
| ebí-runjire 8 | 「ソース」 |
| eci-sígisiro 7,8 | 「小さい土鍋」 |

f. H-5 (終わりから 5 音節目に H があるもの)

- | | |
|---------------------|-------|
| en-tá:gurukane 9,10 | 「十字路」 |
| oku-jéndekereza | 「見送る」 |

アンコーレ語はハヤ語と異なって, (8) に示すパターンの b と c, すなわち (9) の H-1 と H-2 とが単独形では区別されない. ただし, 例えば所有形容詞の「私の」をつければ, 違いははっきりとする. H-1 パターンは, 単独形で ...HL のものが基底形で ...LH となるのに対して, H-2 パターンは, 単独形で ...HL のものが基底形で相変わらず ...HL のままである. これは要するに, 基底で ...HL のパターンを持つ H-2 パターンは, ハヤ語では単独形では ...FL となるがアンコーレ語では ...HL のままであるということが理解される.

(10) 所有形容詞「私の」をつけた場合の発音

- | | |
|------------------|-------|
| a. omuhará wanje | 「私の娘」 |
| b. amarirá ganje | 「私の喪」 |
| c. omukáma wanje | 「私の王」 |

なお (10) の形が導き出される派生は, ハヤ語における (5) 同様, (11) のようなものである. すなわち, 所有形容詞の付加によって統語的 H が語境界上に導入され, それが名詞の最後の音節に取り付く. ただし H が 2 つ連続する場合

は右の H が消される。

(11) 所有形容詞による H の挿入とそれによる変化

- a. omuhara´u-anje 1 → omuhará wanje 「私の娘」
- b. amarirá´ga-anje 6 → amarirá ganje 「私の喪」
- c. omukáma´u-anje 1 → omukámá wanje → omukáma wanje 「私の王」

アンコーレ語でも、二重母音、長母音の場合は、ハヤ語同様、単独形でもその違いは区別される。(12a)は、音韻論的長母音、(12b)は、/u/の半母音化に伴う後続母音の長母音、(12c)は、後続の鼻音複合による長母音の例である。

- (12) a. ecikô:na 7,8 「カラス」
ecikó:na canje 「私のカラス」
- b. omwá:ta 3,4 「雑草」
omwá:ta gwanje 「私の雑草」
- c. omugó:mgo 3,4 「背中」
omugó:mgo gwanje 「私の背中」

以上、アンコーレ語とハヤ語とでは、多少の表面的な違いはあるにせよ、体系としてはまったく同じものを持っているということである(ただしここでも ebí-runjire 8「ソース」のパターンはハヤ語の ekí-laba 7,8「木の实(の一種)」のパターン同様、f(n)=n+1という式の例外となる)。しかしながら、体系としては同じであっても、単独形での音声の実現に加えて、各パターンへの単語の所属ということになればかなりの移動が見られる。5節でこの点に焦点を当てて考察を進めるが、その前にトーロ語の体系を確認しておく。

4. トーロ語

トーロ語の特徴は、すでに述べたように、その声調が体系として消滅していることである。単独形では、休止前2音節目に常に高声調(H)が配分される。以下(13)にハヤ語、アンコーレ語の例に倣ってトーロ語の名詞をその語幹の音節数に従って示す。なお語幹の分節素の構造によって、a. 基本的な CV 構造のも

の, b. 二重母音を含むもの, c. 音韻的長母音を含むもの, d. 鼻音複合による音声的長母音を含むものに細分して示す. いずれにおいても, 単独形では終わりがから2音節目にHが来ることが確認される(語幹の音節数によっては例がないものがある).

(13) トーロ語の名詞(単独形)

1 音節語幹語

- a. omú-ti 3,4 「木」
 b. (例なし)
 c. (例なし)
 d. omú:-ntu 1,2 「人間」

2 音節語幹語

- a. omu-bíri 3,4 「体」
 b. eki-káíga 7,8 「若い豆の莢」
 c. eki-yú:ni 7,8 「小芋」
 d. omu-kí:ndo 3,4 「ナツメ椰子の木」

3 音節語幹語

- a. omu-sigázi 1,2 「青年」
 b. eki-kongóíjo 7,8 「踵」
 c. eki-sokó:ro 7,8 「インゲン豆の葉」
 d. eki-tindí:nda 7,8 「カタツムリ」

4 音節語幹語

- a. eki-jumankóba 7,8 「ヘチマの木」
 b. (例なし)
 c. eki-kalaká:ta 7,8 「鱗」
 d. ø-semutú:ndu 9,10 「大ナマズ」

細かなことであるが, トーロ語にも後続子音の流音性によって, 母音に音声的に下降調が現れることがある. それは最終2音節の分節素が...C₁V₁C₂V₂で, C₂が /r/ の場合である(C₁およびV₁, V₂の性質は問わないが, V₁, V₂は短母音の

み)。ただし、この下降調は、V₁、V₂が/a, e, o/の場合はかなりはっきりとしているが、/i, u/の場合はほとんど生じないか、わずかに生じるのみである。

(14) 終わりの2音節の分節素による下降調の出現(単独形)

- | | |
|------------------|--------|
| a. oruhâra 11,10 | 「禿」 |
| ekihangâra 7,8 | 「口蓋」 |
| b. obusêra 14 | 「粥」 |
| ensêre 9,10 | 「カバ」 |
| c. omuhôro 3,4 | 「伝統的鎌」 |
| ekisôro 7,8 | 「動物」 |

これらの高声調、あるいは下降調は、単独、すなわち休止の前という条件が外れると現れないので、音声的なものであることがわかる((15)参照)。注意すべきは、トーロ語では、ハヤ語、アンコーレ語とは異なって、名詞に所有形容詞-ange「私の」を後続させると、名詞からHが消え、その代わり、句末の所有形容詞の終わりから2音節目がHとなることである。

(15) 所有形容詞-ange「私の」を後続させた場合

- | | |
|---------------------|-------------|
| a. omubiri gwáŋge | 「私の体」 |
| b. ekikaiga kyáŋge | 「私の若い豆の莢」 |
| c. ekiyu:ni kyáŋge | 「私の小芋」 |
| d. omuki:ndo gwáŋge | 「私のナツメ椰子の木」 |
| e. oruhara rwáŋge | 「私の禿」 |
| f. obusera bwáŋge | 「私の粥」 |
| g. omuhoro gwáŋge | 「私の伝統的鎌」 |

5. ハヤ語とアンコーレ語の比較

さて、ハヤ語とアンコーレ語の比較であるが、この2つの言語は、基本的に同じ声調の体系を持っていないが、次の2点において異なる。

- 1) 第2節および3節で見たように, ハヤ語は全ての基底のパターンを単独形でも区別するが, アンコーレ語は, 基底での区別は保持しつつも, 長母音の場合を除き, 単独形ではH-1タイプとH-2タイプを区別しない.
- 2) 各パターンへの単語の振り分けに関してはかなりの異同が見られる. 特に, アンコーレ語においてHの消失が目立つ.

まず上記1) に関してであるが, ハヤ語とアンコーレ語の違いをわかりやすくするため, (16) に同源語を用いて例示する. H-1タイプについては, ハヤ語とアンコーレ語は同じ振る舞いを示すが, H-2タイプでは, アンコーレ語では, 基本的な短母音の場合, ハヤ語のように単独形ではFで示されないから, 基底形での発音と表層形での発音がいずれも最後の2音節が-HLとなる. そしてこの-HLというのはハヤ語のH-1タイプの単独形と同じなのである. これは, アンコーレ語においてH-1タイプとH-2タイプの区別がなくなる方向に一步踏み出していると見ていいであろう. 実際, ハヤ語でもこの2つのタイプは表層では, 終わりから2音節目がH (H-1タイプ) かF (H-2タイプ) かというかなり細かい区別に頼っている.

(16) a. ハヤ語

H-1 ama-líla 6	「涙」
ama-lilá gange	「私の涙」
H-2 omu-kâma 1,2	「王」
omu-kâma wange	「私の王」

b. アンコーレ語

H-1 ama-ríra 6	「喪」
ama-rirá ganje	「私の喪」
H-2 omu-kâma 1,2	「王」
omu-kâma wanje	「私の王」

上記2) の点に関しては, 以下 (17) にハヤ語とアンコーレ語の同源形式の対応例を示す.

- (17) ハヤ語 アンコーレ語
- a. ...HL ...LL
- obwô:ngu 14 obwomko 14 「脳」
- ekifâ:nfa 7,8 ecifamfa 7,8 「乾いたバナナの葉」
- omukâ:te 3,4 omugati 3,4 「パン」
- b. ...LH ...LL
- ekíta 7,8 ecita 7,8 「尋」
- omúti 3,4 omuti 3,4 「木」
- ekigéle 7,8 ecijere 7,8 「足」
- empúnu 9,10 empunu 9,10 「豚」
- énju 9,10 enju 9,10 「家」
- omuára 1,2 omuhara 1,2 「娘」
- c. ...LH ...HL (多くは借用語)
- engége 9,10 enjéje 9,10 「ティラピア」
- endímu 9,10 endímu 9,10 「レモン」 <Swahili
- obuúnga 14 obuhû:nga 14 「粉」 <Swahili ?
- d. ...LL ...HL
- omugo:ngo 3,4 omugô:ngo 3,4 「背中」
- ekilele 7,8 ecirére 7,8 「ヒョータン」
- obudo:ngo 14 obudô:ngo 14 「泥」
- ega:li 9,10 egâ:ri 9,10 「自転車」 <Swahili
- e. ...LL ...LH
- engiri 9,10 enjírí 9,10 「猪」
- omukalo 3,4 omukáru 3,4 「薫製肉」
- f. ...HL ...LH
- ensâ:ki 9,10 enfá:ci 9,10 「雄鳥」
- entú:wa 9,10 entú:ha 9,10 「冠鶴」
- eikô:ti 5,6 ekó:ti 9,10 「外套」 <English

(17) を見てまず目につくことは, (17a) と (17b) において, ハヤ語に存在する H がアンコーレ語で消えていることである. 数の上では, (17b) の対応を示すものが多い. この現象はテイラーなどが, アンコーレ語の “low speakers” と呼んだことに関する (Taylor 1959, Johnson 1976 など参照). それに対して (17c) と (17d) では, 本来ハヤ語では終わりから 2 音節目に H がないにも拘わらずアンコーレ語では終わりから 2 音節目に H が生じている. これは, 恐らくスワヒリ語など, 終わりから 2 音節目に H を持つ言語からの借用が関わっているのではないと思われる. (17e) のパターンは, ハヤ語では本来 H がないにも拘わらずアンコーレ語で H が語末に生じ, それが単独形では終わりから 2 音節目に現れてくる. (17f) ではハヤ語の H がアンコーレ語では語末に移っているが, 単独形では (17e) 同様, 終わりから 2 音節目に H が現れてくる. これは終わりから 2 音節目が長母音であるが, 基底では ...LH であるため (17d) の ...HL とは異なって, 下降調は生じない.

こうして見てくると, ハヤ語とアンコーレ語で異なるものは, (17a) と (17b) のようにアンコーレ語で ...LL となるもの, (17c) と (17d) のようにアンコーレ語で ...HL となるもの, そして (17e) と (17f) のようにアンコーレ語で ...LH となるものの 3 種類に分類できることがわかる. 第 1 のタイプのアンコーレ語で ...LL となるもの (すなわち H-0 タイプ) は, その理由はわからないが, 要するに高声調が消えているものであり, これは基底的にはトーロ語のものである. トーロ語において単独形で終わりから 2 音節目が H となるのは自動的であり, そこに音韻論的に H があるからではない. 第 2 のタイプのアンコーレ語で ...HL となるもの (すなわち H-2 タイプ) は, 単独形では終わりから 2 音節目が H で発音されるわけであるから, これはトーロ語的に見れば, すでに完成された形である. もっとも, 完全にトーロ語になるためには, この H を音韻論的でなくする作業が必要となる. それに対してアンコーレ語で ...LH となる第 3 のタイプのもの (すなわち H-1 タイプ) は, その単独形が ...HL となるわけであるから, 終わりから 2 音節目に H がある H-2 タイプと混同される可能性が生じてくる. 実際アンコーレ語では本節の最初で述べたように, H-1 タイプと H-2 タイプの区別がなくなってきている. そして単独形であっても終わりから 2 音節目

にHがあれば、それは表面的にはトーロ語的である。

ただし、以上に述べたことは、アンコーレ語においてハヤ語と比較した場合トーロ語的性質の見えるもののみを挙げたのであり、そこにアンコーレ語においてトーロ語的性質がすべて示されているわけではない。例えば、アンコーレ語においては(9)で見たように、ハヤ語同様、H-3タイプやH-4タイプなどの名詞があり、トーロ語におけるこれらの消滅には別の理由を求めなければならない。また同じく(9)で示されているように、アンコーレ語においてすべてのH-2タイプの名詞が消えているわけでもない。依然としてH-2タイプの名詞はあるのである。ただ、上で述べたように、その一部が消えていることは事実であり、ここにトーロ語的性格が一部示されているのではないかと考えるのである。

6. 終わりに

本稿の目的は、まず第一に、タンザニア北西部からウガンダ西部にかけて話されているハヤ語、アンコーレ語、トーロ語という系統的に近い諸言語の声調の比較を行うことであった。そして、特に、それらの言語の中でも声調消失という特異性を示すトーロ語に注目し、その過程を探ろうというものであった。密接に関係しているチガ語とニョロ語のデータが欠けているのが難であるが、トーロ語に至る大筋の道は示せたのではないかと思う。

これらの言語を全体として見ると、南から、ハヤ語、アンコーレ語、トーロ語へと北へ行くに従って声調体系の弱화가起こっていることに気づく。本稿は、その理由をこれらの言語自体の中に求めてきたが、そこに外在的要因も関わっている可能性もある。それは、ニョロ語そしてトーロ語というのは、この地域におけるバンツー系諸語の最北端の言語であり、ニョロ語の北はバンツー系とは全く系統の異なるルオ系の言語が話されている。そしてニョロ王国とトーロ王国は、このルオ系集団の影響のもとに王国が形成されたということが言われており(Steinhart 1977 参照)、そのことがトーロ語とニョロ語における声調の消失につながった可能性がある。ただし、こういったことの考察は本稿の範囲を超え、ここではたんにその可能性を指摘しておくにとどめる。

参 考 文 献

- Grimes, Barbara F. (ed.) (2000) *Ethnologue (2 volumes)*. Dallas: SIL International.
- Johnson, Lawrence (1976) Devoicing, Tone, and Stress in Runyankore. In: Hyman L. (ed.) *Studies in Bantu Tonology*, SCOPIL 3: 207–216.
- 梶 茂樹 (2000) *A Haya Vocabulary*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- (2001a) 「ハヤ語の母音と声調—『ハヤ語彙集』に関連して—」『アジア・アフリカ文法研究』29: 181–191.
- (2001b) 「バンツ—諸語の声調—そのタイプ—」『音声研究』5(1): 37–45.
- (2004) *A Runyankore Vocabulary*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Steinhart, Edward I. (1977) *Conflict and Collaboration: The Kingdoms of Western Uganda, 1890–1907*. Kampala: Fountain Publishers.
- Taylor, Charles V. (1959) *A Simplified Runyankore-Rukiga-English and English-Runyankore-Rukiga Dictionary*. Kampala: Fountain Publishers.

A Comparative Study of Haya, Ankole, and Tooro Tone Systems in Connection with Tone Loss in Tooro

Shigeki KAJI
(Kyoto University)

In western Uganda, some closely related Bantu languages such as Ankole, Kiga, Tooro and Nyoro are spoken. These languages are sometimes referred to as the Runyakitara language group. This group also includes Haya, a Tanzanian language which is spoken just to the south of Ankole. When we look at the tone systems of these languages, there are some striking differences. The most obvious difference is that, whereas Haya, and also Ankole to a certain extent, retain a relatively old tonal system (Kiga and Nyoro data lacking), in which the disyllabic –HL, –LH and –LL noun stems are differentiated, Tooro, which is spoken to the north of Ankole, has almost completely lost the original tonal system: the penultimate syllable of the word is always high-pitched in isolation. The author tries to explain how the Tooro system, which phonologically lacks tone, has come into being, by analyzing the differences which exist between the Haya system and the Ankole system. The Haya system is the oldest among these languages, and the Ankole system can be characterized as moving from the Haya system toward the Tooro system. We find in Ankole itself some signs of change, such as non-clear distinction of the underlying –HL and –LH patterns, and high tone loss in a number of words.

(受理日 2005年12月5日 最終原稿受理日 2006年2月5日)